

## リルケとプラーク (その4)

水 沼 和 夫

### Rilke und Prag (4)

Kazuo MIZUNUMA

#### Abstract

Im Herbst 1892 begann sich Rilke, der nach den lang gezwungenen, und endlich aufgegebenen Anstrengungen zu Offizier zurückgekommen war, mit Privatunterricht auf das Abitur vorzubereiten. Und gleichzeitig setzte die Auseinandersetzung der beiden Völker in Prag mit voller Heftigkeit ein. Der folgende Aufsatz, der als eine Ergänzung zu den drei vorliegenden mit demselben Titel entworfen ist, behandelt zunächst den Zustand der Dinge und den politischen Hintergrund von Prag um 1900. Dabei würden wir uns immer mehr über spezifisch Rilkesche Verhältnisse in der spezifischen Milieu deutschen Prags klar.

#### I. プラークの現在一序に代えてー

前世紀の末にカフカ、ヴェルフエル、ブロート、キッシュ、そしてリルケなど多くのドイツ語作家を産んだ街プラークは、現在チェコスロヴァキア社会主義共和国の首都であり、同時にこの国の西半分、即ちチェコ社会主義共和国の首都でもある。それはもはや、ドイツ人の街でもなければ、かつてのような多民族的な都市でもない。チェック人とスロヴァキア人による単一の連邦国家であるこの社会主義共和国においては、全人口約1,500万の95%までがその両民族によって占められている。1918年、ハプスブルク帝国解体とともに成立した第一共和国では、なおも300万以上のドイツ人、75万のハンガリー人、50万のルテニア人、さらにはポーランド人やウクライナ人などが領土内に留どまり続いていた。このようなオーストリア＝ハンガリー帝国時代からの複雑な民族構成が解消されたのは、ようやく第二次大戦後のことである。ドイツ人やハンガリー人は少数の例外を除いて国外退去となり、ウクライナ系の人々が住んでい

たカルパート地区などは、ソ連邦ウクライナ共和国に組み入れられた。また、およそ9万人はいたと言われるユダヤ人はほぼ完全に絶滅されていた。その結果、この国はかつてないほどに単純化された人種構成を持つに至ったのである。

チェック人とスロヴァキア人による連邦の構想は、既に世紀の転換期からTh. マサリク(1850～1937)などによって唱えられていたものであるから、《兄弟民族》の自由意志に基づく平等な結合をうたった1960年憲法において、彼らの民族的悲願は真に達成されたと、言うことができるだろう。

しかし、周知のとうり、終戦直後の米ソ協調とその後の冷戦を背景としたソ連主導型の国家再建、経済政策の破綻とそれを打開すべく試みられた自由化、即ち《人間の顔をした社会主義》の挫折、そして、いわゆる《正常化》と呼ばれる冬の時代、こうした困難な戦後史を概観するとき、この国の地理的条件によって規定された非劇的宿命を感じないではいられない。殊に首都プラークは、それを象徴する街である。西独国境から東に僅か百数十キロ、経度で見るとばヴィーンよりも二度程も西に、この街は位置

昭和62年10月31日受理

\* 一般教育講師

している。西方からの支配を過去のものとした現在、プラークは今度は東方からの強力な影響力に縛られ、再度「長い歴史的経験に裏付けされた忍耐<sup>1)</sup>」の日々を送っている。そして、このような歴史的経験は、一方では、東西のはざまに立つこの国に《東西のかけ橋》という理想をはらませてみているのである。

プラークはいま文字通りの意味でチェック人の街であり、チェック人の手によって新たな歴史を刻みつつある。勿論、ハプスブルク帝国の遺産は余りにも大きい。フラーチン、クラインザイテ、アルテシュタット、ノイシュタットなどの、いわゆる旧プラークは、いまでも中世以来の歴史的文化財に埋め尽くされている。モルダウの水面は、これから「北のローマ」と称えられたその偉容を映し続けるだろう。街はいたるところ、かつての支配者たちによる刻印で溢れている。壮麗な歴史遺産が与える圧倒的な印象に比べれば、チェック人自身による街づくりは極めて遅々としたものにみえる。

しかし、前世紀の末に着手された市域の拡張は、新国家によって受け継がれ、市の人口も120万に達しようとしている。遠く郊外へと広がった新興住宅地の先端は、高層化されたビルの群れで銀灰色に光っている。そして、クラインザイテの丘のうえ、フラーチン城の西には未来様式の展望塔がそびえ立つ。それは「百塔の街」と言われる旧プラークに対するアンチテーゼでもあるかのように、かつてを偲ぼうとする人々を冷ややかに見下ろしている。

中世的、中欧的外観は両次大戦、1968年のチェコ事件を経た現在でも無傷のまま保たれている。しかし、その実生活においては当然のごとくドイツ色は一掃されている。街路や広場の名前からも、かつてのドイツ人社会を思い起こすことは全くできない。カールス・ブリュッケはカール・ヴ・モストだが、クラインザイテはラマー・ストラナ、リルケゆかりのヘレンガッセ、アム・グラーベンは各々パンスカー、ナ・ブルイコペーとなっている。したがって、歴史

的経緯にもかかわらず、またその外観に覚えるであろう郷愁にもかかわらず、ドイツ人はここでは明らかに外国人なのである。ドイツの有名な旅行案内書「ペーデカー」はプラークにおけるドイツ語事情を次のように紹介している。

「チェック語が一言も分からなくても、安心してプラークに旅することができます。入管職員はドイツ語に堪能ですし、ホテル、空港、鉄道、旅行事務所の係員もドイツ語を理解しますし、話すこともできます。いまでも成年層の間ではドイツ語は大変広まっておりますし、若者達とはたいてい英語か仏語で通じ合うことができます<sup>2)</sup>」

これが何世紀にも亘ってゲルマン化を甘受してきたボヘミアの古都プラークにおける、現在の言語生活の実態である。第二次大戦の経験者は、必要とあれば、いまはまだドイツ語を話すことができる。彼らはこの街におけるドイツ語社会の、最後の証人となる人々だ。ただし、彼らのドイツ語に秘められた記憶は、ゲルマン世界との関係史上で最悪のものとなったナチ占領時代であり、フラーチン城のバルコニーに立つアドルフ・ヒットラーの不吉な姿なのである。オーストリア生まれのこの汎ゲルマン主義者によって、ドイツ的プラークの歴史はただいたずらに引き伸ばされることになったのだった。しかし、いま、辛酸の余韻を響かせる彼ら戦争体験者のドイツ語とともに、その歴史は確実に閉ざされようとしている。

## II. プラークの青春

プラーク生まれのリルケが、その街の現実と直接的に関係していた期間はそれほど長くはない。彼がプラーク大学からミュンヘン大学に移ったのは1896年秋のことであり、これを機にプラークとの関係は徐々に薄れてゆく。それまでの21年間は、それ自体としては短いとは言えないだろう。しかし、既に述べたように<sup>3)</sup>、幼い頃には大人達の間で用心深く守られていたであ

ろうし、ギムナジウムに入る年齢になると幼兵学校の寄宿舎に送り込まれてしまった。リンツ時代も含めれば、その後のほぼ6年間をプラークの外で過ごしたのである。夏の休暇にしても、たいていは母とともにボヘミアの保養地などに出掛けていた。したがって、リルケがその青春期までの成長過程をとらして、故郷の街のプラークと実質的に関りを持ったのは、ほんの4、5年のことなのである。しかし、このことはプラークという特殊な社会環境がこの詩人の世界観に与えたであろう影響の大きさを低く見積もる理由にはならない。というのも、その4、5年こそ、多かれ少なかれ制限を受けてきた少年の本性が一気に解き放たれた時期なのであり、同時にプラークにおける民族主義闘争が帝国の崩壊に向かって盲目的に突き進み始めた時期でもあるからだ。

ルネ・マリーア・リルケがリンツの高等商科学校を突然退学したのは、1892年5月のことだった。一種の恋愛事件がその背景にあったのだと推測されているが、詳細については不明である。ともかくも、このことによって、伯父ヤロスラフを始めとするリルケ家の人々も、またルネ自身も、この少年が士官になる可能性は完全に潰えたのだということを認めなければならなくなった<sup>4)</sup>。プラークに舞い戻ったリルケは、今度もまたヤロスラフの家長的影響力の下ではあったが、方向を転換して大学入学のための私宅教授を受けることになった。資金面での援助を約束した伯父はこの年の暮れに、脳溢血の一種で急死するが、個人の意志は遺族によって受け継がれた。本格的な勉強が始められたのは、秋になってからだだったが、既に17歳になろうとしていたルネの集中的な努力は順調に成果をあげていったのである。

僅か10歳にして兵学校の寄宿舎に送り込まれたことは、後に詩人となるべき少年にとって、肉体的にというよりは、精神的に、殊に同じ性向にある同僚や指導的才能との交流の欠如という点で、大きな損失だった。ホフマンスタール

のような恵まれた環境に育った天才詩人を引き合いに出すまでもなく、ギムナジウムを経たすべての人々と比べて、リルケに与えられていた条件は弊害の多いものだったろう。私宅教授の3年間は、創作活動の面においても、最初の本格的な試みが為された時期であった。何年もの遅れを取り戻すべき計画的な勉強の一方で、自らの内で沸々と湧き出てくる詩作への意欲もまたそれまでの償いを要求したのだった。リルケの最初の詩集となった『人生と唄』の第一稿は、既に1893年早々に成立している。プラークをはじめとして、ヴィーン、シュトラースブルクなどの新聞雑誌に作品を発表し始めたのもこの年のことである。

そして、『人生と唄』の献辞の受け取り手であり、また出資者でもあったヴァレリーーとの出会いも、様々な点で若いリルケを啓発していったであろう。ヴァレリーー・ダヴィット・フォン・ローンフェルト(1874—1947)は、文学や美術の愛好者で、短編小説や陶器の彩色など実際に創作活動に関係することもあり、後にはリルケの作品に対する批評者ともなった。一歳年上のこの女性とリルケが出会ったのは1893年の1月3日で、彼の従姉妹の紹介だったという。早くも翌4日には『ぼくらの最初の出会いの後で』という詩が書かれ「愛らしい瞳は明るく澄んで/小さな歯がとても繊細/頬は紅色巻いた髪<sup>5)</sup>」という彼女への愛を告白している。以後、1895年の終わり頃まで二人の親密な関係は続き、多くの詩が彼女に捧げられた。その間、1894年12月3日から4日にかけて、即ち、19歳の誕生日を迎えるという夜に、リルケは彼女に宛てて長い手紙を書いている。それは「力も心もある二人の人間の例のように、互いに助け合い、助言しあって<sup>6)</sup>」彼女とともに芸術の道を歩んで行こうという希望の表明であり、その計画には「憧れの所帯」を築くことも含まれている。また、それに先立って述懐された幼年時代からの詳細な回想は伝記的資料としても極めて重要なものだ。リルケは「ぼくの幼年時代の明るさに乏し

い物語」を告白することによって、彼女の信頼と愛を獲得しようとしたのだろう。そして、『人生と唄』（1894年）で、彼女は発行の際の共同出資者となり、『家神への捧げ物』（1896年）では、表紙の装丁者となった。これらはまさしく二人の共同の産物として生み出されたものと見る事ができよう。

実際にはこの共同は永くは続かなかった。それどころか、リルケは後に『人生と唄』を全く破棄してしまう。一方、ヴァリーは後に回想記を公にしているが、W. レップマンによれば、それは明らかにリルケへの憎悪を含んだ暴露的なものになっている、という<sup>7)</sup>。彼女は一生を独身のまま終わった。しかし、ふたりの関係のこうした後味の悪さは、若いリルケの芸術と人生に対する真剣さを疑う理由にはならない。後のリルケが愛する女性たちとの間に打ち立てようとした関係を念頭に置くなら、我々はその未成熟な原型をここに見ているのだ、と言えよう。クララ・ヴェストホフとの関係にしても、それが成功した例なのかどうかは、評価の別れるところだろう。ただし、異なるのは、ヴァリーが結局は愛好家に止どまり、芸術の道には踏み入らなかった、という点だ。

彼女に芸術家としての才能が果たしてあったのかどうか、ということよりも、彼女が上級将校を父とし、高名なチェク詩人ユリウス・ゼイエル（1841～1901）を兄に持つチェク人女性を母とする家庭の生まれであった、という事実の方が、我々の関連からは遙かに重要である。私宅受講生の頃のリルケは、ヴァインベルクにあったこの半チェクの家庭に頻繁に出入りしていたのであり、ヴァリーの伯父にあたる老詩人とも実際に面識を持ったのである。ゼイエル自身は狭隘な民族主義を否定する《ルミール派》の詩人で、ブラークの過激な社会状況とはほとんど無関係だったが、リルケにとってはチェク民族の代表的国民詩人の一人だった。『ユリウス・ゼイエルに宛て』と題した賛歌は「汝は巨匠のひとりだ。遅かれ早かれ/汝の民族は汝

の勝利の車に目を驚かすだろう/彼らの心根と伝説とを汝は称賛し/その唄からは故郷の靈気が吹き寄せる<sup>8)</sup>」と唄っている。『家神への捧げ物』に収められたこの作品は、『カイェタン・ティール』や『自由の響き』などととも、若いリルケの親チェック的姿勢を証明するものとなっている。チェック人とドイツ人の対立を背景にしながら、若いリルケはボヘミア的なものへの深い愛着を自然な欲求としてその内面に抱いていた。ヴァリーとの関わりは、その意味でリルケのブラーク時代を象徴しているのである。『人生と唄』に収められた詩のひとつ『願い』は次のように唄っている。

ぼくは思う、あの青々とした丘が  
遙かから ぼくを見詰めている…  
大切な故郷よ、ぼくに羽根があったら  
おお、どんなにか喜んで  
おまえのところに飛んで行くのに！<sup>9)</sup>

『人生と唄』が主にリンツ時代までの習作から成っていたのに比べ、『家神への捧げ物』は本当の意味で、ブラークにおけるリルケの青春から生まれてきた最初のもの、と見なされよう。

「ボヘミアのなかに〈その力の強靱な根〉を降ろしている<sup>10)</sup>」この第二の詩集は、その背景に両民族の対立という現実があっただけに、作者が示したボヘミアへの愛、チェク民族への同調的姿勢によって彼の全生涯の作品の中でも特別に社会的、政治的色合いを帯びたものとなっている。

強要された軍人への道からようやくにして解放された後で、ルネ少年を改めて迎え入れることになった環境社会は、決して暖か味のあるものでもなければ、平穏なものでもなかった。チェック人の血をひくヴァリーとの恋は、青春の甘味な夢でもあっただろうが、同時に否応なく彼の目を民族的対立という現実に向けさせるものでもあった。若いふたりを取り巻いていたのは、次章に見るように〈チェック対ドイツ〉に

揺れるブラークの喧噪であり、出口のない民族主義抗争に明け暮れる暴力的な日々だった。

### III. 激化するナショナリズム

『オーストリアの100年』のなかでヘルムート・アンディクスは「1893年というこの年にボヘミアの対立は激烈に始められた<sup>11)</sup>」と言っている。《召使の民族》と蔑まれながらも絶対的な多数派であったチェック人と、上層階級をほぼ独占しながらも明らかに少数派であったドイツ人との対立が、「言語」と「選挙権」を巡って、ボヘミアの古都プラークを以前にも増して激しく揺り動かし始めたのだ。H. アンディクスは、この年の5月に始まるプラークの混乱ぶりをドキュメント風に描き出している。

ボヘミア州議会では青年チェック党の議員達が演台の上板を騒々しく打ち鳴らし、会議を中断せざるを得なくなるまで止めなかった。きっかけはたわいのないことだったが、どんなことでも言語闘争には持ってこいなだった。数人の青年チェック党議員が速記係を味方に付けて議事録をずたずたに切り裂き、調書綴りを引き千切っては紙つぶて合戦を繰り広げた。投票用紙の詰まった投票箱は蹴飛ばされてしまった<sup>12)</sup>。

混乱は議事堂の中だけに留どってはいなかった。8月には、フランツ・ヨーゼフ皇帝の誕生日を祝う軍楽隊の行進が暴動を誘った。ドイツ人とチェック人の殴り合いが始まり、出動した警官隊はこれら双方の群衆とやり合わなければならなかった、という。しかも、街頭での騒ぎはこれで終わりになったわけではなかった。

9月には再び騒乱に火が着いた。プラークにはボグロムの気運が漂った。トイッ人は街中追い回され、ドイツ人の商店は打ち壊され、ドイツ人の家には火が着けられた。プラーク守

備隊の7,000人ではこの騒乱の鎮圧には足りなかった。他の領邦諸州からボヘミアに部隊が派遣されなければならなかった。プラークでは公共の建物に刻まれている皇帝の鷲のマークが泥で塗り潰され、郵便ポストの鷲はペンキで上塗りされた。最後には皇帝の立像の首に縄が巻きつけられたのである<sup>13)</sup>。

この頃、ヴィーンではターフェ伯が民主的な選挙法を帝国議会に提出した。彼にとってこれは危機回避のための第一策に過ぎなかったが、保守派はそれを「革命的」なものと受け取った。議会は荒れ狂い、10月末、皇帝は「かつての学友でもあれば多年に互る忠実な家臣でもあったエドワルド・ターフェ」に見切りをつけたのだった。既に1891年の選挙では、「消極的抵抗」の老人チェック党が青年チェック党に3倍以上の差で敗れ、ボヘミアでの主導権を失ったばかりか、中央政府への影響力も失いつつあった。彼らの敗因はターフェ内閣による分離化政策に妥協的だったことだといわれる。チェック人の間により急進的で、より民族主義的な主張が広がり始めていることは、誰の目にも明らかとなっていたのだ。しかし、選挙法の民主化は退けられ、14年間に互って比較的穏健に多民族問題を処理してきたターフェ伯の内閣は辞職に追い込まれたのである。

そして、リルケの『ポーシュ王』のモデルとなる〈せむし男〉ルドルフ・ムルヴァの死体がクラインザイテの貧民窟で発見されたのが、同じ年の11月23日のことだ。この男は皇帝政治と自民族内の穏健派を標的とするチェック青年層の秘密結社《オムラディナ<sup>14)</sup>》の構成員だった。彼は計略的に《宮廷爆破計画》を立てさせたいうえで、これを警察の統制下に置き、検挙者70人にもものぼる掃討作戦を可能にしたのだという。その後この組織内では彼が秘密工作員だったという疑いが持ち上がり、殺害されるに至ったのである。

これが1893年のプラークだった。それまでの

リルケが知っていた、比較的平穏なターフェ内閣の時代は、彼の帰りを待っていたかのように、崩れ去った。それは1871年のボヘミアにおける《妥協：アウスグライヒ》の失敗と幻滅に続く「休息の時代<sup>15)</sup>」であり、パラッキーの理想が輝きを失うとともにオーストリア自由主義も後退し、民族問題への有効な解決策も見いだせないまま、ついには青年チェック党とともに双方の民族主義が台頭してくるまでの猶予期間なのだった。そして、周知のように、帝国内の諸民族による激烈な民族主義の台頭こそ第一次大戦の直接の引き金を用意したものであり、ハプスブルク帝国を崩壊へと導いたばかりか、強いては次の大戦の主要な要因ともなったものなのである。

#### IV. 激化の背景

1893年の危機は、老チェック党に代わって登場した青年チェック党と、それをより急進的に煽り立てる学生、若い芸術家、労働者のグループの結合によって生じたものだった。青年チェック党はもともとスラブ色の濃い、つまり反ゲルマン的な政党だったが、新興の中産階級がこれを支持し、民族主義的気運の高まりと共に勢力を増してきたのだった。ここからより過激な一派やマサリクの現実派などが分離してゆく。チェック人の《民族の父》パラツキー、オーストリアの自由主義者フィシュホーフ、ドイツ系ボヘミア人シュセルカなどが唱えたような「諸民族の平等な権利に基づく連邦制多民族国家としてのオーストリア」という構想はもはや過去のものとなり、パラツキーを師と仰ぐマサリクにとっても、それは政治的空想に過ぎなかった<sup>16)</sup>。現実主義者の彼にとっては、この政治的空想こそ1871年の《妥協：アウスグライヒ》を失敗に終わらせたものだと思われたに違いない。つまり、A.J.P. テイラーのような見方をするなら、和解の前提としてチェック人側が「シレジアやモラヴィアも含む、全オーストリアの

連邦的改編」などという要求を出さなかったなら妥協は成立していたであろうし、それによってチェック人は帝国内においてハンガリーのマジャール人と同等の位地に立つことができたはずなのである<sup>17)</sup>。上述のような理想的な連邦制の構想は、両大戦を経た現在の東欧の状況を前にするなら、ハンス・コースンが言うように、惜しまれるべき先見性を有していた、と判断されるであろう<sup>18)</sup>。東西の多種多様な文化と民族が会合する場として、オーストリアは「大きな抱擁力と強い個性<sup>19)</sup>」を備えた「ローマの理念<sup>20)</sup>」をあるいは実現できたのかもしれない。しかし、史実に見る政治的現実としては、チェック側の要求は明らかに過剰なものだったのであり、ドイツ側に「帝国じゅうのドイツ人を糾合し、またハンガリー人によびかけて、自分達の脅かされた地位<sup>21)</sup>」を声高に触れ回る契機を与えたに過ぎなかった。交渉は打ち切れ、ドイツ人側が覚悟していた一定の譲歩も取り下げられた。《妥協》は失敗に終わった。それはチェック人が1867年の《オーストリア＝ハンガリーの妥協：アウスグライヒ》以来、来る日も来る日もデモや集会を繰り返して手にした最後のチャンスだった。それ以降チェック人は再び希望のない惨めな状況に置かれ続けなければならなかったのである。1926年のリルケは、彼の幼い頃のチェック人の状況を「あの好奇心にとみ、勤勉な国民はばかげたことに、自国の言葉の味わいを忘れるほど諦めきっていた<sup>22)</sup>」と回想している。そして、こうしたチェック人の屈辱的な状況こそ、より現実的でより民族主義的な青年チェック党が台頭してくる要因となったものだ。老チェック党を退けた後、彼らは「民族全体としての目標を捨てて、優柔不断の政府からすこしづつ政治と文化の面での譲歩をとりつけることをめざし、そのために議会での議事妨害や取引という戦術<sup>23)</sup>」に精力を集中していった。それが青年チェック党の主要な行動原理だった。そこに明確な国家理念が欠けていたということは<sup>24)</sup>、彼ら自身も出口のない状態にあったことの証明で

ある。彼らの要求が急進化することは、ドイツ人側の態度の硬化を呼び、「自民族の絶滅を阻止するためには団結せねばならない<sup>25)</sup>」などという宣伝がドイツ人市民層に幅広く受け入れられていった。その結果モラヴィアやブコヴィナにおいては《アウスグライヒ》が次々と成立していったにも拘わらず、ボヘミアは1918年のチェコ・スロヴァキア第一共和国まで屈辱的な地位に置かれ続けたのだ。

一方、《アウスグライヒ》の失敗によって窮地に立たされたのは、歴史的事実としては、明らかにドイツ人の方だった。そのことについての明確な認識がなかったところに、プラークドイツ人の非現実的外観が浮かび上がってくるのだ。「彼らはまだ自分達が多数派住民に対抗するに足るだけの力を持っていると信じていた<sup>26)</sup>」のだし、伝統的特権を自ら棒に振ろうなどと欲する訳はなかった。ただし、「プシェミスル家の王たちが何世紀も前に最初のドイツ人商人、手工業者たちをこの国に召喚して以来、彼らはずっとここに住み着いていたのだ<sup>27)</sup>」という事実も、抗争の要因のひとつとして考慮に加えるのが公平なところではないだろうか。1918年の敗戦をラウチンで迎えたタクシス夫人が、少しの危険も感じずにいられたことは、そうした歴史のひとつの証明でもある<sup>28)</sup>。ボヘミアのドイツ人は、自分達が本来移住者であることを意識しうするためには、余りにも永くそこに定住してきたのだった。フリッツ・マウトナーが、1918年になっても以下のように感じていたことは、彼がユダヤ系であっただけに歴史の皮肉でもある。即ち、「わたしは十分骨の髄までドイツ系ボヘミア人であるから、プラハはすでに、今日、ドイツ人たちが嫌われる外国人として暮らさねばならぬ、そうしたスラブ人の町になってしまい、ボヘミア全体もいずれ近いうちにチェコ人の支配に陥ってしまうだろうとの考えは、わたしはふんまんやる方ない気持ちをあらわにしてしか到底述べることができない<sup>29)</sup>」と。ボヘミアドイツ人の定住権の主張は「ドイツ人は13世紀の初

めに主として移住者や植民としてここに来たのではなく、はじめから定住し続けていた<sup>30)</sup>」という誇大な宣伝となって現れた。しかも、彼らは「あらゆる分野、あらゆる時代を通してこの地域の文明化に務めたし、その貢献は偉大であり、とび抜けて重要であった<sup>31)</sup>」という、自負の念も持っていた。多かれ少なかれ、チェック人がドイツ人の築いた基盤のうえで発展してきたことは、当時としては否定しがたい実状であったろう。言語闘争の一方でチェック人が相変わらず進んでドイツ語を学んでいたことは事実だし、ドイツ人を徐々に追い詰めていった議会闘争にしても、それを根底で支えていたのはオーストリア・リベラリズムに基づく法体制だった。帝国の東半分であるハンガリーでは、寡頭制が支配しており非ハンガリー人には選挙権さえ実質的には認められていなかったのだ。

しかし、こうした議論はどれも実りあるものとはならない。というのも、ボヘミアにおいてそれほどドイツ的なものが広まりえたということは、その裏返しとして、当然チェック的なものの後退を意味していたのだから。事実、チェック人は民族固有の言語さえ失いかねない事態に追い込まれたのだ。チェック劇場やチェック大学を巡る彼らの街頭運動には民族の悲願とドイツ人への怨念が込められていた。また、白山の戦いにまで逆のぼるなら、敗北したチェック人貴族の領地は悉くドイツ人に分け与えられたのだ。上層階級を我が物顔で独占し続けるドイツ人に対し、チェック人がいかに根の深い民族的怨念を抱くことになったか、それは十分に推測しうるところである。

一方ドイツ人は、急進化するばかりのチェック側の要求をもはや受け入れることはできないと感じていた。例えば、1894年のプラーク市議会における、街路名、市街区名などはすべてチェック語だけで表示されるべきだ、とする決議に対し、ドイツ人側は現行憲法と道路表示の公共性を唯一の拠所として憲法裁判に訴えたのだった。判決は市議会の決定を違憲であるとし

たが<sup>32)</sup>、それほどにプラークのドイツ人は追い詰められていたのだった。マウトナーがチェック人側の主張を「暴君の<sup>33)</sup>」と受け取っていたのは、あながち誇張とばかりは言えないのである。仮に、ターフェ伯の選挙法改正案やバデニーの言語令が成立していれば、それはそのままボヘミアにおけるドイツ人社会の崩壊を意味したであろう。

## VI. 特殊プラーク的情况と特殊リルケ的情况

しかし、過激な局面は、当時はまだプラークだけの問題だった。多民族問題がとりわけボヘミアにおいて重大さを増し、それがハプスブルク帝国を大いに悩ませていたのは確かだ。しかし、「国民の圧倒的多数が民族的不満に燃えたとか、抑圧や不公正を意識していたとか想像するのはまったくの誤りであろう<sup>34)</sup>」とA.J.P. テイラーが言っているように、プラークの情况をもって全体を推し量ることは出来ない。それは相対的な意味におけるプラークの特殊性をも見誤ることになる。H. アンディクスも「1893年のプラークの暑い夏も、ウィーンの視点からは、ボヘミアの騒乱に責任があるのは、既に警察と即決裁判が処理することのできた数人の首謀者だけであるかのように思えただろう<sup>35)</sup>」と言っている。首都での生活は「無数の小さな保証や後ろだてのあるこの市民的に安定した世界<sup>36)</sup>」のなかに置かれていた。

プラークのドイツ人にとって、実情は全く別だった。彼らが置かれていた情況は、ドイツ人住民が多数を占める国境地帯は勿論、当時のオーストリア＝ハンガリー二重帝国のどの都市とも違っていた。ドイツ人とマジャール人貴族が他民族を完全に押さえ付けていたハンガリーにおいて、ブダペストは「優雅で享乐的な百万都市」であり、「第二のウィーン」だった。ほんの一握りの人々にとってではあっても、そこには自由で束縛されない雰囲気広がっていたのだ。そして、リルケと同じ頃、メーレン州の田

舎に生まれ育ったルドルフ・カスナー（1873-1959）にとっても、プラークは異質な街だった。「スラブ的なものは我々ふたりにとって、風景や言語をとおして馴染みのあるものとなっていました。私の記憶ではリルケはチェック語で自分を表現する事はできなかったと思いますので、この点では田舎育ちの私のほうが多分馴染んでいたでしょう。ドイツ対チェックの対立に関しては、これはプラークにおいては特別だったのですが、田舎でよりは都市でのほうが広まっていたのでして、私よりもリルケにとって身近なことだったのです。メーレンの田舎にいた私は少しもそういうものを感じませんでした。（中略）さらに、ボヘミアではフス戦争の痕跡が未だ完全には消し去られてはいないように思われましたが、より辺境の地であるメーレンではボヘミアよりもカソリック的でした<sup>37)</sup>」このように言うことによって、カスナーはリルケのプラーク体験を、全オーストリアの状況からも区別した形で、特徴づけたのだった。

プラークの特殊性は、既に多くの人々が認めてるところだ。この街の中世的外観やゴーレム伝説に象徴される神秘的、異教的雰囲気とそれを醸し出している一角のユダヤ世界、日常生活に染み込んだスラブ性などは、プラークを語るときに、忘れてはならない重要な特質である。しかし、リルケが17歳からのほぼ4年間を過ごしたプラークを何にも増して特徴づけていたのは、激化の一途をたどるチェック人とドイツ人の民族的対立である。それはボヘミアの都プラークにおいて特別に先鋭化していた。この時代のハプスブルク帝国が「ヨーロッパの実験室<sup>38)</sup>」だったなら、プラークはその実験台であり、運命の手に握られたフラスコだった。

そしてまた、その間のリルケの体験は、プラークの特殊性に関連して常に、そして、互いに引き合いに出される「同時代人」たちの体験とも同じではなかっただろう。それは彼らの多くがユダヤ系であったからばかりでなく、微妙な年齢差にもよるのである。1893年といえばカフカ



やブロートはようやくギムナジウムに入った頃であり、ヴェルフエルは小学校にも入っていなかった。逆に、年長のフリッツ・マウトナーが、「わが郷土のための民族闘争に対して、もはややる気を十分持てなくなってしまった<sup>39)</sup>」ためにベルリンに去ったのは、リルケ誕生の翌年、即ち1876年のことだった。マウトナーが体験したブラークは、1871年に失敗に終わった《ボヘミアでの妥協》を巡る抗争期であり、その後の経済危機を境としたオーストリア自由派の退潮期である。一方、リルケの幼年期は「ターフェの言語令」に象徴される保守的改革の時代であり、その青春期は《オムラディナ反乱》に始まる継続的危機の時代なのだ。やがてリルケもまた、バデニー内閣のもとで普通選挙法が成立した1896年にミュンヘンに移り、「バデニーの言語令」が出された翌1897年には、ルウ・アンドレアス＝ザロメとともにベルリンに移った。この「言語令」に際しては、ドイツ人側の不満が爆発し、ブラークばかりかヴィーンを始めとするオーストリア中の都市で激しい抗議行動が起きた。それは汎ゲルマン主義者ゲオルク・フォン・シェーネラーの活躍のために格好の舞台を提供したのだった<sup>40)</sup>。リルケの年少の「同時代人」たちが体験するブラークの青春は、これ以後の時代を背景とすることになる。つまり、この10歳程の年齢差が示しているのは、彼らが体験しなければならなかったような反ユダヤ主義としての汎ゲルマン主義や、それに対抗するシオニズムなどは、リルケにとっては飽くまでも副次的、予備的な要素に留どまっていたのだ、ということだ。《チェック人对ドイツ人》という図式こそリルケのブラーク時代を性格づける中心テーマだった。

リルケにとってそれは第一に、生の基盤としての「大切な故郷」を失うか否かの問題だった。世紀末ヴィーンの芸術家たちの心をとらえていたものが「解体しつつある社会に占める個人のあり方の問題<sup>41)</sup>」だったように、ブラークにおいて若いリルケが直面していたものもまた、彼の

眼前で崩れ去ってゆこうとする「世界」であり、しかも、ブラークの場合は文字通理の意味で消滅の危機に瀕していたのである。危機の始まりだった1893年、その年の終わりには、リルケは既に《故郷喪失者》としての己の運命を予感せざるをえなかった。

実に多くの人々が 故郷もなく

この大地を彷徨い行かねばならないとしても  
大地はすべての者に ひとつの故郷を  
その懷で ついには与えるのだ<sup>42)</sup>

1893年のリルケは、「僕の精神の自然児たちを世間に呈示する時ではない<sup>43)</sup>」と考えて、受験勉強に精を出していた。その意気込みが、夏の休暇をも断念させたのだらう、インゲボルク・シュナックの詳細な『クロニク』による限り、まるまる一年をブラークで過ごしている。それがために、彼は上述のような不穏な動きを居ながらにして余さず見聞するところとなった。彼自身が非難を受けているドイツ人なのだった。単なる傍観者としてではなく、利害関係者のひとりとして、彼はブラークの民族主義闘争に重大な関心を寄せてゆくのである。

勿論、それは「悲歌」の詩人の、若き日のほんの一側面に過ぎないかもしれない。しかし、その青春の全体像にとっては欠くことのできない重要な側面でもある。1892年秋の『僕は脈動する人生が好きだ』で言っているように、若いリルケは波乱万丈の人生を進んで受け入れ、死の瞬間には「わたしは愛し、そして生きた<sup>44)</sup>」と言えることを願ってその青春を始めたのだ。『家神への捧げ物』を「ボヘミアのなかに〈その力の強靱な根〉を降ろしている」ものとしたり、『きくにがな草』の発行に際しては、彼の唄が「もしかすると、民衆の魂のなかでより高い生に育ってゆく<sup>45)</sup>」ことを願ったのも、すべて現実社会との直接的な結び付きを切望していたことの証左だ。芸術活動は人生そのものでなければならず、社会や民衆に緊密に結び付いたものでな

ければならなかった。1898年の講演『現題詩』において政治的な詩を否定した<sup>46)</sup>時にも、芸術は「あらゆる事物との合意を見いだすこと」であり、「芸術家は人生から除外された者でないというだけでなく、そればかりか、芸術はむしろ活動的で、むしろ遠慮会釈のない生の形式として<sup>47)</sup>」見なされるべきものである。

## 注 解

- 1) 岩田賢司：「チェコ事件」；『東欧現代史』有斐閣選書，昭和62年，S.241.
- 2) Baedekers “Allianz Taschenbuch Reisefürer, Prag” 1985 1987, Stuttgart/Freiburg; S.152.
- 3) 拙論は「リルケとブラック（その1）」；『八戸工業大学一般教育部研究会会誌第8号』59年，「同（その2）」；『八戸工業大学紀要第4号』昭和60年，「同（その3）」；『八戸工業大学一般教育部研究会会誌第9号』昭和60年，と同様「リルケとブラック」の一部を成すものだが，必要上重複する事項について言及する場合がある。以下においては，こうした重複については特に記さないこととする。
- 4) リンツの商科学校を卒業すれば，士官になる道はまだ残されていた。
- 5) Reiner Maria Rilke: Werkausgabe: Rainer Maria Rilke, Sämtliche Werke, Frankfurt/M, 1955-1966（以下，WA 1-12と略す）6, S.478.
- 6) Schnack, Ingeborg: Rainer Maria Rilke, Chronik seines Lebens und Werkes, Passavia Passau, 1975,（以下，Chr. I-IIと略す）I, S.28ff.
- 7) Leppmann, Wolfgang: Rilke, Sein Leben, sein Welt, sein Werk; Scherz Verlag, 19-81, S.56f.
- 8) WA 1, S.35.
- 9) WA 5, S.16
- 10) WA 12, S.1203.
- 11) Andics, Hermut: Das österreichische Jahrhundert, Wilhelm Coldmann Verlag, 1980, S.252.
- 12) a.a.O., S.251.
- 13) a.a.O., S.251f.
- 14) a.a.O., S.304.
- 15) ハンス・コーン：『ハプスブルク帝国史入門』稲野強他訳，恒文社，1985年，S.112.
- 16) a.a.O., S.77.
- 17) a.a.O., S.222ff.
- 18) a.a.O., S.73f.
- 19) a.a.O., S.74.
- 20) 「リルケ書簡集 III」塚越敏，後藤信幸訳，国文社，昭和52年，S.59.
- 21) 「ハプスブルク帝国史入門」；『資料』，S.224.
- 22) 「リルケ書簡集 III」S.58.
- 23) P.F. シュガー，I.J. デラー：『東欧史研究会訳：「東欧のナショナリズム」』，刀水書房，1981年，S.149.
- 24) a.a.O., S.150.
- 25) 「ハプスブルク帝国史入門」；『資料』，S.231.
- 26) H. Andics, S.252.
- 27) a.a.O., S.253.
- 28) Rilke/Marie von Thrun und Taxis: Briefwechsel, 1986, Frankfurt/M, S.563f.
- 29) F. マウトナー；平田達治，平野嘉彦訳編「ブラハ」，国書刊行会，1986年，S.76.
- 30) 「東欧のナショナリズム」，S.173.
- 31) a.a.O., S.173.
- 32) 「東欧現代史」S.60.
- 33) F. マウトナー，S.75.
- 34) 「ハプスブルク帝国史入門」；『資料』，S.228ff.
- 35) H. Andics, S.252f.
- 36) S. ツヴァイク：『昨日の世界I』原田義人訳，みすず書房，1982年，S.50.
- 37) Rudolf Kassner: Rilke, v. Klaus E. Bohnenkamp, 1976, S.73.
- 38) 「ハプスブルク帝国史入門」S.154.
- 39) F. マウトナー，S.90.
- 40) S. トゥールミン/A. ジャニック：『ウィットゲンシュタインのウィーン』藤村龍雄訳，TBSブリタニカ，1978年，S.65.
- 41) K.E. ショウスキー：『世紀末ウィーン』安井琢磨訳，岩波書店，1985年，S.20.
- 42) WA 5, 74.
- 43) Chr. I, 25.
- 44) WA 5, S.31.
- 45) a.a.O., S.112.
- 46) WA 10, S.363.
- 47) a.a.O., S.365.